

北海道方言の共通語化・新方言の半世紀後の様相

～実時間トレンド調査による検証～¹

高野照司（北星学園大学）

1. はじめに

本発表では、北海道方言の語彙および文法項目の使用（意識）について、筆者が2010年夏から2011年初頭にかけて行った経年的調査の成果を論じる。

戦後、日本各地の諸方言が盛んに研究され、全国的規模での「共通語化」の進行が明らかにされてきたが、各地の若者世代によるその土地固有の「新方言」の生成（井上1983）や地元方言への回帰現象（真田1999）など、全国一律の共通語化とは相反するローカルな変化も日本各地で報告されている。北海道方言においても、約20年を経て行われた国研の2度の調査（国研1965, 1997[1987年調査の成果報告]）により、実時間的視点から全道的な共通語化が明らかにされた一方で、特に若い世代における新方言現象の存在も確認されている（小野1983, 国研1997）。

しかしながら、1980年代後半から90年代初頭に行われた調査（国研1987年調査、1990年調査の小野1993など）を最後に、その後の北海道方言の共通語化の様相や今日でも消失したとは言い難い「北海道方言」の実態を大規模に記述した研究はほとんど見当たらない。² それからはほぼ半世紀を経た今、共通語化は北海道でどのような進展を遂げたのか、また、それとは逆行する「土着化」的変化として、かつての「新方言」がその後、北海道でどのように伝播し、今日の北海道方言の固有性を保っているのかなど、いくつかの重要な問いが残る。本発表は、これらへの回答を得るための試みの一つと言える。

2. 今、実時間研究が注目されている

従来の言語変化研究の大半は、現時点で観察される世代差を、その言語が過去から現在にかけてきた変化の道筋を映し出すものと想定する「見かけ上の時間」仮説に基づいて行われてきた（Chambers & Trudgill 1998）。しかし、当該仮説のみに立脚した調査だけでは、比較的若い世代で進行中と見られる変化が一過性の短命な変異に過ぎないものなのか、その後も長く生き残り、やがてはそのコミュニティ全体に拡散する「変化」となりうるのか、それらを見極めることは難しい。言うまでもなくその見極めには、一定の時を経た後、同一コミュニティを対象に、同一の方法で繰り返し調査する実時間的アプローチが強く望まれる。

特に近年、久しく「見かけ上の時間」研究が圧倒的主流であった海外の社会言語学においても、「実時間研究」の重要性を改めて指摘する学派が台頭を見せている。実際の時の流れの中で、調

¹ 調査の趣旨を理解し、積極的に資料収集を行ってくれた北星学園大学在学生の皆さん、被験者として調査にご協力をいただいた道民の皆様は心より感謝申し上げます。本研究は、文科省科研費『急速なグローバル化による地域方言の変容と話者心理に関する社会言語学的研究』（挑戦的萌芽研究、2009～2011年度、代表者：高野照司）、および国立国語研究所共同研究プロジェクト『接触方言学による「言語変容類型論」の構築』（代表者：朝日祥之准教授）からの研究助成を受け行われている。

² ただし、本記念大会における尾崎氏・朝日氏によるご発表はこの例外と言える。また、札幌市内の高校生を対象とした道場（1994）、東北地方との関連で特に北海道沿岸地域の方官分布を大規模に調査した井上他（2003）、見野（2010）、見野・朝日編（2012）などもある。

査対象コミュニティに生じた社会変動と深く関係する地域方言の変化の動態（Blake & Josey 2003）、個々の話者が日々営む社会生活の変化や価値観（イデオロギー）の変化に伴う個人語の「生涯変化」³（Kerswill & Williams 2000; Sankoff & Blondeau 2007）など、実時間調査でなければ得難い知見は、言語変化研究の中心的課題である「変化原因」（なぜ変化が起こったのか）や「変化プロセス」（どのように変化したのか）の解明に極めて有益なものとなる。

その点、日本国内の方官研究に目をむけると、国研による鶴岡調査を始め、そこは実時間研究の「宝庫」と言える。北海道方言の研究もその例外ではなく、国研や小野米一氏を主軸として大規模な調査がこれまで精力的に行われてきた。本発表では、こうした研究成果の豊かな蓄積から多くを学びとり、北海道方言の今日の姿を記述し、変化の今後の方向性を考えてみたい。

3. 先行研究 ～調査Ⅰ（国研1965）・調査Ⅱ-a（国研1997）・調査Ⅱ-b（小野1983）～

本発表は、主として以下で解説する三つの大規模調査（国研1965, 小野1983, 国研1997）の成果を土台に、北海道方言の語彙および文法の経年的推移を記述する。便宜上、調査実施年の古い順に、調査Ⅰ（国研1965）、調査Ⅱ-a（国研1997）、新方言に特化した調査Ⅱ-b（小野1983）、そして本発表（2010～2011年調査実施）を調査Ⅲとする。

ただし、特に国研による調査Ⅰ（国研1965）・調査Ⅱ-a（国研1997）は、調査対象地、調査項目、分析結果の掲載方法などにおいて統一性を欠く部分も多く、実割合（%）による経年的推移の記述が困難な場合がしばしばある。そのため、調査ⅠおよびⅡ-aにおける複数の調査成果を総合的に読み取りながら各調査項目の経年的動態を把握し、本調査（調査Ⅲ）の結果との対応関係を考察することにした。各先行調査において参考とした調査の概略は以下のとおりである。

調査Ⅰ — 国立国語研究所（1965）

- ・「3世調査」： 1959年実施。札幌（52名）、帯広（48名）、釧路（61名）における3世を対象とした調査。被験者総数161名（男59, 女67）。36才以上・25～35才・24才以下の3年齢層での比較。調査票を用いた面接による語彙・文法・発音・アクセントの調査。
- ・「富良野調査」： 1959年実施。10代2世50名、10代3世50名、30代2世50名、30代3世50名。被験者総数200名（男100, 女100）。調査票を用いた面接による語彙・文法・発音・アクセントの調査。
- ・「高校調査」： 1960年実施。全道に散らばる40高校を対象。各高校の生徒5～6名ずつ、被験者総数239名（男139, 女100）。調査票を用いた面接による語彙・文法・発音・アクセントの調査。

調査Ⅱ-a — 国立国語研究所（1997）

- ・「富良野パネル調査」： 1986年実施。前回調査（調査Ⅰ）に参加した住民のうち106名を再調査。調査方法は調査Ⅰと同様。ただし、結果の開示は、語彙項目、アクセント項目の一部のみ。
- ・「高校生調査」： 1988年実施。全道に散らばる52高校を対象。各高校の生徒50名以上、

³ 言語形成期以降も、言語はその話者の生涯を通じて変化しうるとする学問的立場。

被験者総数 2688 名。郵送式の回答者自記式調査票による語彙・文法の調査。

- ・「富良野継続（トレンド）調査」： 1986 年実施。無作為抽出による富良野市民 300 名に面接および留め置き式アンケートを実施。語彙・文法・発音・アクセント・言語行動などの調査。ただし、結果の開示は、文法、発音、アクセント項目のみ。
- ・「札幌継続（トレンド）調査」： 1987 年実施。無作為抽出による札幌市民 351 名に面接および留め置き式アンケートを実施。富良野継続調査の札幌版。ただし、結果の開示は、文法、発音、アクセント項目のみ。

調査 II-b - 小野（1983）

新方言の使用に注目し、札幌市、旭川市、網走市の中学校・高等学校で行われた、語彙と文法に関するアンケート調査。場面差や標準語意識なども含む。中学生・高校生（若年層）1087 名（男 545、女 573）、その親（中年層）652 名（父 196、母 443）、合計 1739 名が被験者。札幌・旭川は 1980 年、網走は 1981 年に調査を実施。

4. 本調査（調査 III）：北海道方言トレンド調査

4.1 調査の概要

先行研究を参考に項目を精選し、北海道方言の語彙（73 項目）と文法（41 項目）からなるアンケート調査（直接回収または郵送）を 2010 年夏から 2011 年初頭にかけて実施。北星学園大学の学部生・大学院生を中心に、学生の同世代の友人（若年層）、学生の親や親世代の知人（中年層）、学生の祖父母や祖父母世代の知人（老年層）など、スノーボール方式で調査規模を徐々に拡張した。北海道方言の分布パターンから全道（表 1）を「札幌」（表 2）・「（札幌を除く）内陸部」（表 3）・「海岸部」（表 4）の 3 地域に分けて地域間のバランスがとれるように配慮した。（しかし、結果的に男女の総数（男 78、女 163）が不均衡なままで終わり、とりわけ性差を論じる際には注意が必要。）

表 1 調査 III（本調査）の被験者（全道）

	青年層(15-29)	中年層(30-59)	老年層(60+)	合計
男	20	34	24	78
女	60	60	43	163
合計	80	94	67	241
割合	33.2%	39.0%	27.8%	

表 2 調査 III（本調査）の被験者（札幌市）

	青年層(15-29)	中年層(30-59)	老年層(60+)	合計
男	13	11	8	32
女	27	19	9	55
合計	40	30	17	87
割合	46%	34.5%	19.5%	

表 3 調査 III（本調査）の被験者（札幌を除く内陸部）

	青年層(15-29)	中年層(30-59)	老年層(60+)	合計
男	4	11	8	23
女	15	22	13	50
合計	19	33	31	73
割合	26%	45.2%	28.8%	

表 4 調査 III（本調査）の被験者（海岸部）

	青年層(15-29)	中年層(30-59)	老年層(60+)	合計
男	3	12	8	23
女	18	19	21	58
合計	21	31	29	81
割合	26%	38.3%	35.8%	

調査 III（2010～2011）時点で、調査 I での若年層は老年層、調査 II(a,b)での中年層は老年層、若年層や中・高校生は中年層に属することになる。

4.2 経年的変異・変化の類型⁴

調査 I、II(a,b)、および本調査（調査 III）の結果から、北海道方言の語彙および文法の使用（意識）の経年的推移を以下の 3 タイプ（「衰退型」・「保持型」・「土着語化」）に分けた。⁵ 3 つのタイプ分けは、調査 I、調査 II(a,b)当時の当該語彙・文法項目の使用（意識）状況と現時点（調査 III）での変異の様相との対比に基づいている。

タイプ I「衰退型」

共通語化の進行を背景に方言形は衰退の一途をたどる。衰退の経年的推移パターンからさらに 3 細分類：I-A「死語化」、I-B「漸次衰退」、I-C「近年衰退」を設定。

I-A「死語化」項目： 調査 I ですでに衰退が指摘され、調査 II(a)で急激な衰退が確認。調査 III では、特に若い世代（中年層・若年層）へ向け死語化が進む。

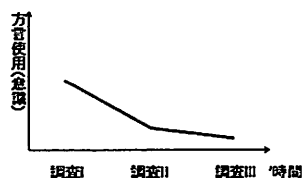
調査 II(a)において、調査 I 時点からの激減または衰退が見られる項目。また、調査 II(a)の高校調査で全道的な衰退または特定地域（特に海岸部）のみでの限定的な保持が見られる項目。各項目のカギ括弧内には、調査 III における全道（必要に応じて、地域差・男女差）の使用割合(%)の平均値を年齢層（老年・中年・若年）ごとに付記した。下線項目は、後に詳細を議論する項目。

⁴ アンケート調査の電算化に関わりお手伝いをいただいた中村裕介氏（北海道大学情報科学研究科大学院生）にこの場を借り感謝の意を表したいと思います。

⁵ 本発表では、時間的制約から特筆すべき項目のみ詳細を論じるが、それ以外の項目についての詳細な議論は、2013 年度秋発行予定の「北星論集」（北星学園大学文学部紀要）に掲載するつもりである。

タイプ 衰退型

細分類A「死語化」



げル(仲間に入れる) [老 22%, 中 13%, 若 3%, ※海岸老 22%, 中 13%, 若 0%]・**タナク**(重い物を持ち上げる) [老 27%, 中 12%, 若 0%, ※海岸老 43%, 中 20%, 若 0%(聞く m33%)]・**ヤバチー**(ヤバシー)(きたない) [老 37%, 中 14%(m23%, f8%), 若 1%, ※海岸老 47%(m63%, f41%), 中 20%(m25%, f17%), 若 5%(使った m33%, 0%)]・**ホイト**(乞食) [老 27%(m43%, f18%), 中 17%(29%, f10%), 若 4%(m5%, f3%)]・**オガル**(草や木が成長する) [老 39%, 中 33%, 若 7% ※海岸老 54%(m75%, f41%), 中 40%(m33%, f44%), 若 14%(m33%, f11%)]

文法: **カケレル**(書くことができる) [老 6%, 中 5%, 若 0%]

これらの項目は、調査 I の結果を基にした調査 II(a)における消長の判別、および将来の変化予測が妥当であった例だと言える。また、若い世代へ向けての急激な方言形の衰退は、特に札幌・内陸部で顕著で、海岸部はなんとか踏みとどまっている様相を呈する。

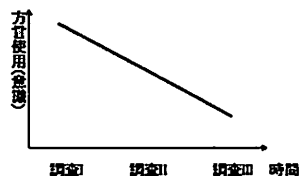
本類型では、唯一**カケレル**が調査 II(a)からの予測どおりにならなかった。調査 I 時点では「全道的によく使われている」とされ、調査 II(a)では「全般的に減少したがなお全道的に使う」「本州でも広がりつつある新型」とみなされたが、その後の四半世紀で受け継がれることはなくほぼ死語化した。

I-B.「漸次衰退」項目: 調査 I から調査 III にかけて衰退が徐々に、かつ着実に進行。調査 III では特に若年層での使用がかなり少ない。

調査 I から調査 II(a)にかけて微減が見られた項目。

タイプ 衰退型

細分類B「漸次衰退」



39%)]・**ナンボ**(いくら) [老 22%(m26%, f18%), 中 27%(m47%, f17%), 若 12%(m20%, f10%)]・**ヤム**(曲が痛む) [老 55%, 中 45%, 若 20%]・※(本調査のみ) **ヤツパンシ**(やはり) [老 42%, 中 26%, 若 15%]

歴代: **ゴシヨイモ**(じゃがいも) [老 13%(m30%, f5%), 中 0%, 若 0%]・**カイベツ**(きゃべつ) [老 5%, 中 0%, 若 1%]・**ストーブ**(ストーブ) [老 5%, 中 0%, 若 0%, ※海岸老 10%(m13%, f5%)]・**エント**(エントー)(煙突) [老 13%, 中 2%, 若 3%, ※海岸老 13%(m25%, f9%)]・**カガト**(かかと) [老 57%, 中 10%, 若 5%, ※海岸老 70%(m88%, f64%), 中 13%(m0%, f22%), 若 14%(m33%, f11%)]・**クロブシ**(くるぶし) [老 12%, 中 13%, 若 3%, ※海岸老 13%, 中 17%, 若 5%]・**スツカイ**(すっぱい) [老 0%, 中 0%, 若 0%]・**カテル**(カ

ゼル)(仲間に入れる) [老 22%, 中 13%, 若 3%, ※海岸老 22%, 中 13%, 若 0%]・**タナク**(重い物を持ち上げる) [老 27%, 中 12%, 若 0%, ※海岸老 43%, 中 20%, 若 0%(聞く m33%)]・**ヤバチー**(ヤバシー)(きたない) [老 37%, 中 14%(m23%, f8%), 若 1%, ※海岸老 47%(m63%, f41%), 中 20%(m25%, f17%), 若 5%(使った m33%, 0%)]・**ホイト**(乞食) [老 27%(m43%, f18%), 中 17%(29%, f10%), 若 4%(m5%, f3%)]・**オガル**(草や木が成長する) [老 39%, 中 33%, 若 7% ※海岸老 54%(m75%, f41%), 中 40%(m33%, f44%), 若 14%(m33%, f11%)]

文法: **カケレル**(書くことができる) [老 6%, 中 5%, 若 0%]

歴代: **アク**(灰) [老 52%(札幌 m43%, f22%), 中 20%, 若 2%]・**シバレル**(池の水が凍る) [老 30%, 中 17%, 若 8%]・**ハツチャキニナル**(一生懸命になる、思い切り頑張る) [老 41%, 中 32%, 若 8%]・**アメル**(腐る) [老 70%, 中 54%, 若 14% (知らない m55%, f60%)]・**ユルクナイ**(楽でない) [老 68%, 中 42%, 若 25% ※海岸老 87%, 中 47%, 若 24%]・**アズマシー**(気楽だ、心地よい、ゆったりしている) [老 75%(m61%, f82%), 中 60%(m57%, f61%), 若 29%(m35%, f25%) ※海岸老 80%(m88%, f77%), 中 77%(m75%, f78%), 若 33%(m0%, f39%)]・**ナンボ**(いくら) [老 22%(m26%, f18%), 中 27%(m47%, f17%), 若 12%(m20%, f10%)]・**ヤム**(曲が痛む) [老 55%, 中 45%, 若 20%]・※(本調査のみ) **ヤツパンシ**(やはり) [老 42%, 中 26%, 若 15%]

文法: **コイバ**(コエバ)(来れば) [老 16%(m17%, f5%), 中 13%(m17%, f7%), 若 4%(m0%, f2%)]・**カクン**(書くなら) [老 11%(m13%, f9%), 中 5%(m11%, f2%), 若 1%(m0%, f2%)]

これらの結果から、上記 I-A と同様、調査 I の結果を基にした調査 II(a)における消長の判別、および将来の変化予測は大方妥当であったと言える。また、衰退の進度は海岸部が他地域に比べ遅い。

ただし、**池の水がシバレル**について、調査 II(a)時点では、「水(池など)の凍結」と「固形物(手拭いなど)の凍結」の使い分けの消失、および共通語形「凍る」との併用が示唆されたが、四半世紀後(調査 III)には「凍る」が席卷。固形物への使い分け意識は、多少残っているようである(以下 II-C 参照)。

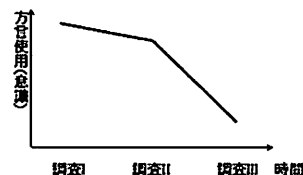
コエバについて、調査 I で従来の**コイバ**からの乗り換え、特に若い男女での「新方言的伸び」が指摘されたが、調査 II(a)の富良野および札幌調査で**コエバ**に代わる新形**コレバ**が若い世代で進出。調査 II(b)でも**コレバ**は「新方言」と特定。しかし、調査 III では**コレバ**(タイプ III-C)に代わり**クチャー**(以下タイプ II-B 参照)の新勢力が確認できる。

I-C.「近年衰退」項目: 調査 I、調査 II(a)時点ではともに隆盛だったが、調査 III で急激に衰退。

調査 I から調査 II(a)にかけて微減だが安定、または安定的な使用が見られた項目。調査 II(a)の高校調査で、微減だが全道的に保持とされた項目。

タイプ 衰退型

細分類C「近年衰退」

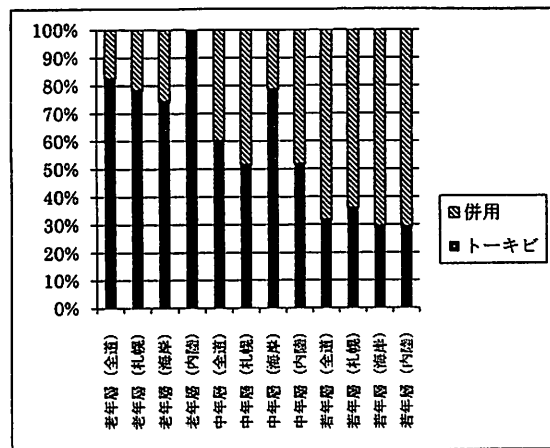


歴代: **デレッキ**(デレキ)(火掻き棒) [老 89%, 中 81%, 若 10% (知らない: m55%, f88%)]・**アキアジ**(アキヤジ)(さけ) [老 39%, 中 20%, 若 4%]・**シバレル**(ひたく寒い) [老 82%, 中 75%(内陸 m85%, 55%), 若 30%(内陸 m50%, f27%)]・**シバレル**(手拭いが凍る) [老 53%(m43%, f50%), 中 22%(m11%, f27%), 若 9%(m0%, f12%)]・**オツカナイ**(おそろしい) [老 72%, 中 53%, 若 33%]・**オバンデス**(こんばんは) [老 25%, 中 7%, 若 2%]・**コワイ**(コワカッタ)(疲れた、くだびれた) [老 84%, 中 76%, 若 23% ※海岸老 90%, 中 87%, 若 38%]

若 38%)]・**トーキド**(とうもろこし) [老 76%(m74%, f70%), 中 53%(60%, f44%), 若 28%(m30%, f25%)]

文法: **カクニイ**(書きやすい) [老 26%, 中 8%, 若 4%]・**コラセル**(来させる) [老 28%(m17%, f34%), 中 22%(m20%, f24%), 若 1%(m0%, f2%)] ※海岸部老年 43%, 中年 33%, 若年 5%]・**コラス**(来させる) [老 6%, 中 3%, 若 1%]・**タベラセヨ**(食べさせよう) [老 15%(m13%, f16%), 中 14%(m9%, f15%), 若 4%(m5%, f3%)] ※海岸部老年 16%, 中年 20%, 若年 0%]・男性話者の(勉強)**シレ**(命令形シロ) [老男 9%(女 2%), 中男 11% (女 0%), 若男 5%(女 3%)] ※内陸老男 13% (女 0%), 中男 18% (女 0%), 若男 0% (女 7%)]・**シレバ**(シリヤー)(すれば) [老 3%, 中 9%, 若 0%] ※内陸中年男性 27%, 札幌中年 3%, 海岸中年 3%]・**フラワサッタ**(自発) [老 70%, 中 58%, 若 32% ※「知らない」若年 55%]

グラフ1 トーキビ・トーモロコシの併用(調査III)



これらの項目は、調査II(a)時点では衰退の兆しが見られるものの安定しているとされたが、四半世紀後、その状況は続かず、若い世代へ向け急激な衰退が見られる。ここでも海岸部での衰退の進捗は他地域に比べ若干だが遅めである。

アキアジ (アキヤジ) について、調査II(a)で「アキアジ」は下位場面(インフォーマル)、「サケ」は上位場面(フォーマル)と場面による使い分けが増加傾向とされたが、調査IIIでは「サケ」への移行が顕著に見られ、場面差も消失しつつあるようである。

調査II(a)で「絶対的に安定」とされたシバレル(ひどく寒い)も調査IIIでは激減。(手拭いが)シバレルも、調査II(a)では安定的とされたが、調査IIIでは激減した。しかし、家事がより身近な女性にその使用割合が高いのは興味深い。また、同じシバレルでも、「水の凍結」と「固形物の凍結」では、前者の衰退がより速かった(タイプI-A)。

同様に調査II(a)時点で「絶対的に安定」と見られたトーキビも、調査IIIでは若い世代へ向け、共通語形「とうもろこし」との併用を伴う衰退を示す。若い世代ほど共通語形「とうもろこし」との併用が全道で一様に増えている(グラフ1)。「トーキビ」は各年齢層ともに男性が若干多い(老年男74%、女70%; 中年男60%、女44%; 若年男30%、女25%)。一方、共通語形との併用は、特に中年層において女性の使用が多い(中年男26%、女39%; 若年男55%、女57%)。これらの性差は特に札幌で顕著(札幌中年男33%・女56%、札幌若年男38%・女62%)。

海岸部起源のコラセルは、調査II(a)時点で全道に使用域が拡大したが、調査IIIでは急激に衰退。調査II(a)時点で、特に札幌の若者が採用したと思われるが(調査III: 札幌中年45%)、次世代に受け継がれなかった。調査IIIでは、それに代わり、新形コサス(以下タイプII-C参照)が登場し、共通語形「来させる」との併用が盛んと思われる(全道老年48%・中年51%・若年69%)。特にコサスは、札幌の若い世代で伸びが見られる(札幌若年37%、札幌中年26%、札幌老年13%)。

同じく海岸部起源のタベラセヨも上記コラセルの状況と酷似。調査IIIにおいて若い世代での新形タベサソー(タイプII-C)が広まり(全道若年23%、中年20%、老年20%)、共通語形「食べさせよう」と併用されている。

(勉強)シレは、調査I時点で、(勉強)スレと同様、「北海道共通語と断じていい」と指摘。調査II(a)では、シレが富良野で、スレは札幌でと伝播の地域差が指摘されたが、調査IIIでは、地域に関わりなく、シレは激減しスレが生き残る。派生形であるシレバ(シリヤー)も同様に激減。

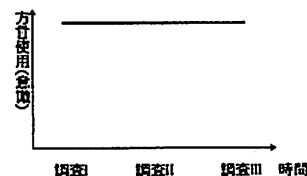
タイプII「保持型」

共通語化と共存しながら根強く生き残る項目。そのサバイバルパターンからさらに3細分類: II-A「安定保持」・II-B「微減保持」・II-C「中・小規模保持」を設定。

II-A.「安定保持」項目: この半世紀を通し一貫して高い割合で保持。

調査Iから調査II(a)にかけて安定的な使用とされた項目。調査II(a)の高校生調査では微減だが全道的に保持されているとされる項目。(使用が安定していても性差が顕著な項目はこのカテゴリーに含めない。)

タイプII 保持型
タイプII 細分類IIA「安定保持」



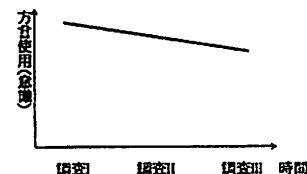
語彙: ショツパイ(塩辛い) [老89%、中99%、若99%]・ナゲル(捨てる) [老85%、中85%、若87%]
文法: 該当なし。

ショツパイ・ナゲルともに方言意識は薄い。

II-B.「微減保持」項目: この半世紀で微減は見られるが、比較的高い割合で保持。徐々に共通語項目への移行が見られる項目。

調査Iから調査II(a)にかけて微減だが安定的、または安定した使用とされた項目。調査II(a)の高校生調査では微減だが全道的に保持されているとされた項目。(使用が安定していても性差が顕著な項目はこのカテゴリーに含めない。)

タイプII 保持型
タイプII 細分類IIB「微減保持」



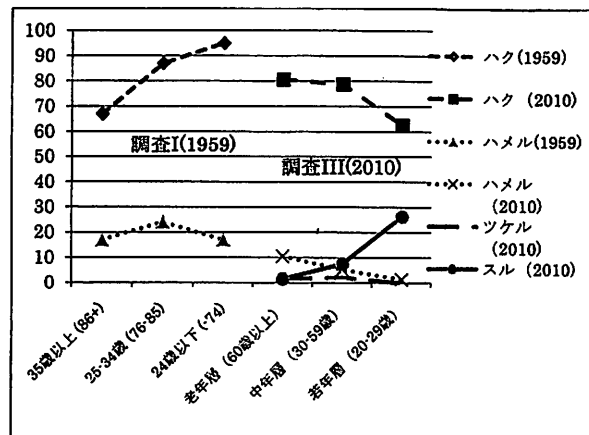
語彙: バクル(交換する) [老59%、中72%、若63%]・メンコイ(かわいい) [老83%(m83%、f82%)、中72%(m74%、f69%)、若70%(m50%、f77%)] ※海岸老87%(m100%、f82%)、中87%(m75%、f94%)、若86%(m67%、f89%)・カジル(かみつく) [老73%(m65%、f75%)、中76%(m71%、f81%)、若55%(m50%、f60%)] ※内陸老57%(m50%、f62%)、中85%(m82%、f86%)、若68%(m50%、f73%)・ミツタクナイ(みにくい) [老81%、中73%、若58%] ※海岸老80%、中87%、若71%・カツチャク(ひっかく) [老76%、中72%、若69%] ※海岸老80%、中77%、若76% ※内陸老76%、中67%、若84%・

シャツコイ(ヒヤツコイ)(冷たい) [老45%、中53%、若50%] ※札幌若43%(m54%、f37%)、内陸若53%(m25%、f60%)、海岸若62%(m67%、f61%)・(手袋を)ハク(はめる) [老86%、中83%、若69%] ※スル: 札幌若年m15%、f22%

文法: カカサラナイ(状況可能な否定) [老80%、中77%、若67%]

これらの項目は、調査II(a)で衰退の兆しはあるものの安定して使用とされ、調査IIIでもその状況が続く。これらの項目についてはどれも「方言意識あり」だと思われる(調査III)。

グラフ2 「(手袋を)ハク」の経年変化: 調査I(1959) vs. 調査III(2010-11)



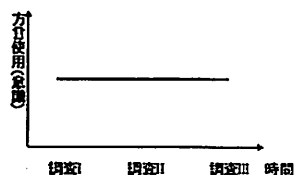
東京新形「スル」(荻野・山敷 1983)への漸次的移行が見られる(グラフ2、調査IとIIIの比較のみ)。「スル」の使用は特に札幌の女性に多い。

II-C. 「中・小規模保持」項目: この半世紀で中・小規模ながらも、比較的安定的に保持。

過去半世紀において、地域差や性差などが一貫して見られる項目。

タイプII 保持型

タイプII 細分類IIC 「中・小規模保持」



若男 0% 女 7%, 海岸若男 0% 女 17% ※札幌中男 42%, 内陸中男 9%, 海岸中男 0%・男性話者のオキレ(起きる) [老男 43% (女 9%), 中男 60% (女 10%), 若男 75% (女 10%)]・アタラシイベ(質問調) [老 13%(m61%, f34%), 中 23%(m46%, f7%), 若 37%(m65%, f28%)] ※札幌若男 77% 女 22%, 内陸若男 55% 女 47%, 海岸若男 33% 女 22% ※札幌中男 25%, 内陸中男 64%, 海岸中男 50%]・コサス(来させる) [老 18%(m26%, f14%), 中 22%(m37%, f14%), 若 28%(m50%, f20%)] ※札幌若男 62% 女 26%, 内陸若男 36% 女 18%, 海岸若男 33% 女 17% ※札幌中男 42%, 内陸中男 36%, 海岸中男 33%]・タベサソー(食べさせよう) [老 20%, 中 20%, 若 23%]

メツパについて、調査IIaで確認された地域差(海岸部「メツパ」・内陸部「ものもらい」)は、調査IIIで特に男性話者が維持しているが、女性話者については海岸部においても「ものもらい」への移行が見られる。

イクベ(勧誘)について、調査Iでは「全道的によく使われて」おり、調査II(b)でも富良野

メンコイは、北海道特有の存在意義があり(調査II(a)、調査IIIでもそれが継承)。

道場(1994)による札幌市内の高校生調査からシャツコイ(ヒヤツコイ)には性差(女性の多用)が見られたが、調査IIIでは性差が薄まった感がある。

(手袋を)ハクは、調査I・調査II(a)ともに安定的な使用が認められたが、本調査では特に若い世代における

と札幌の若い世代へ向け、使用が増加。高校生調査では全道的に使われており、地域差はないが、性差が顕著とされる(平均 35%, 男子 62%・女子 8%)。調査IIIでこの傾向はそのまま拡張。目立った地域差はなく、全道的に中年層(調査II当時の若年層)だけでなく、若年層男性でも多用。

カクベ(推量)について、状況は大方上記イクベ(勧誘)と類似しているが、調査II(a)では、「仲間用語」として富良野若年男性が札幌若年男性よりも多用するという地域差が指摘。調査IIIでは、上記のような都市間・地域間格差は確認できず、全道的に中年層(調査II当時の若年層)だけではなく、若年層男性でも多用が見られる。また、調査II(a)時点で、特に若い女性の間で広まり始めたカク(ツ)ショ(以下タイプIII-A)が調査IIIでは爆発的に拡張し、男性話者にも波及しつつある。

(勉強)スレ(しろ)は、調査I時点で「北海道共通語」、調査II(a)では特に札幌の若い世代で急速な伸びが指摘された。調査IIIでは、札幌中年男性(調査II(a)当時の若年層)を中心にスレが保持されており、同地の若年層男女ともに継承されている。また、調査II(a)高校生調査で、全道で女子中心に広がり始めたシナ(以下タイプIII-A)は調査IIIで全世代に拡張し、男性話者にも波及しつつある。

オキレは、調査IIIでも全道的に広く男性話者による使用が見られる。

タイプIII 「土着語化」

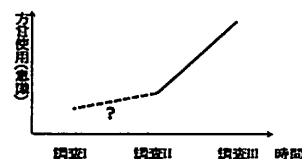
共通語化に逆行する方言形の新たな生成と伝播。その伝播のパターンからさらに4細分類: III-A 「拡散」・III-B 「中・小規模拡散」・III-C 「短命」・III-D 「若年再生」を設定。調査II(a, b)時期に注目された「新方言」のその後の様相。6

III-A. 「拡散」項目: 調査II(a, b)で「新方言」として若い世代による生成が指摘され、調査IIIでは中年層(調査II時点の若年層)のみならず、老年層への伝播や次世代への継承が確認。

明らかな言語変化。

タイプIII 土着語化

タイプIII 細分類IIIA 「拡散」



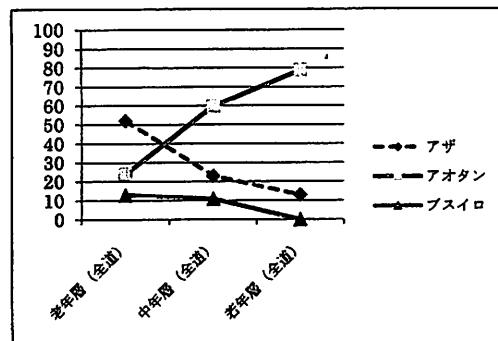
腐発: オデコ(デコ)(顔) [老 54%(m30%, f66%), 中 72%(m69%, f75%), 若 73%(m65%, f75%)] ※デコ [老男 4%, 中男 9%, 若男 30%]・アオタン(あざ) [老 24%(m17%, f27%), 中 60%(m57%, f61%), 若 79%(m70%, f82%)] ※内陸老 14%, 中 70%, 若 84% ※アザ・全道老 57%, 中 24%, 若 14% ※ブスイロ 海岸老 7%, 中 23%, 若 0%]・アツタカイ(あたたかい) [老 97%, 中 100%, 若 100%]・コチヨバス(くすぐる) [老 73%(m78%, f66%), 中 80%(m83%, f78%), 若 81%(m55%, f90%)]

6 当然のことながら、変化をし続ける言語において「新方言」の生成は、調査I時点でも見られた事象であろうが、ここでは先行研究成果との経年的比較を目的とするため、主に調査II時期(1980年代)に確認された新方言項目に限定して論じる。従って、調査IIで主に若い世代が用いる「新方言的」項目であっても、調査I時点ですでに全道で広く使われていると指摘されている場合は除外することにした。

文法: (勉強) シナ (しろ) [老 63%(m13%, f66%), 中 51%(m17%, f68%), 若 60%(m25%, f70%)]・オキナ (起きろ) [老 60%(m13%, f62%), 中 55%(m11%, f75%), 若 54%(m5%, f68%)]・

イイジャン (いいじゃないか) [老 10%(m0%, f16%), 中 50%(m46%, f53%), 若 90%(m85%, f92%)] ※札幌中年男 42% 女 53%, 内陸中年男 64% 女 59%, 海岸中年男 33% 女 33%]・カク (ツ) ショ (書くだろう (推量)) [老 55%(m30%, f68%),

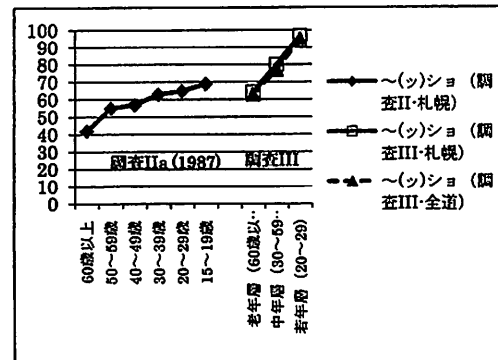
グラフ3 アオタン (調査III)



中 55%(m34%, f66%), 若 65%(m35%, f73%)] ※札幌中年男 17% 女 74%, 内陸中年男 55% 女 50%, 海岸中年男 33% 女 78%]・(念押し)の行く(ツ)ショ (行くでしょ?) [老 66%(m52%, f73%), 中 82%(m71%, f88%), 若 94%(m95%, f93%)]・(牛) ミタク ((牛) のように) [老 71%, 中 81%, 若 91%]・ケド (けれども、けれど) [老 55%, 中 75%, 若 88%]

オデコは、1990年代の札幌市内高校生による使用が平均 76%(男 66%, 女 83%)であったが (道場 1994)、次世代にもひき継がれている。デコも若年層男性で増えている。

グラフ4 念押しの「行く(ツ)ショ(行くでしょ?): 調査II vs. 調査III



中年層 (調査II時代の若年層) のみならず他世代にも波及。特にカク (ツ) ショ (推量) は、道場 (1994) による札幌市内高校生調査で顕著な性差が指摘されたが (男 7%, 女 48%)、調査IIIでは、男性も多用するようになっている。

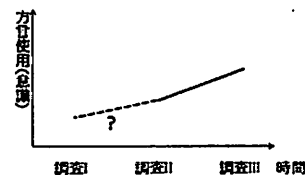
(念押し)の行く(ツ)ショ (行くでしょ?) について、調査II(a)で札幌における年齢との規則的相関が明らかにされた (グラフ4)。高校生調査でも「全道に広がる」新方言と指摘 (全道平均 75%, 男 63%, 女 86%)。調査IIIでは、札幌のみならず、全道規模で全世代での使用が拡大したと見られる。特に若い世代では圧倒的の支持。性差はなくなり男女共用となった。

ケドは、首都圏新方言とされる項目 (河崎・井上 1983)。調査IIIでは、若い世代へ向け着実な広がりを示す。

III-B. 「中・小規模拡散」: 調査II(a,b)で若い世代による生成が指摘され、調査IIIでは中・小規模ながら中年層 (調査II時点の若年層) のみならず、他世代への伝播が確認。

タイプIII 土着語化

タイプIII 細分類III 「中・小規模拡散」



語彙: コチョコバイ類 (コチョコバシー・コソバイ) (<

すぐったい) [老 39%(m44%, f36%), 中 43%(m46%, f41%), 若 40%(m25%, f45%)] ※札幌老 13%, 中 45%, 若 45%]・ネツバル (ねばる) [老 41%(m12%, f28%), 中 34%(m15%, f20%), 若 35%(m9%, f23%)] ※札幌老 25%, 中 45%, 若 28%]・イツチョマエ (一人前) [老 67%, 中 73%, 若 60%]・オモシクナイ (おもしろくない) [老 23%(m6%, f16%), 中 32%(m13%, f18%), 若 43%(13%, f31%)] ※札幌老 25%, 中 42%, 若 45%]・シタラ (そしたら) [老 8%(m4%, f9%), 中 21%(m23%, f19%), 若 43%(m25%, f42%)] ※札幌老 0%, 中 25%, 若 30%]

30%]

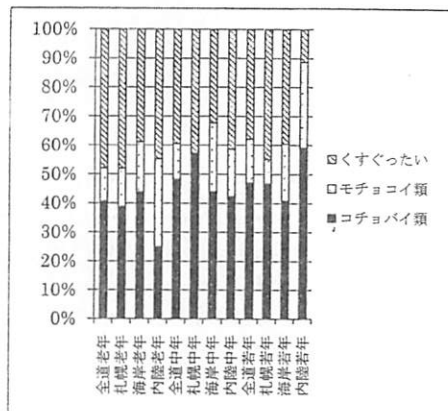
文法: (勉強) スリヤー (すれば) [老 6%(m9%, f5%), 中 8%(m6%, f8%), 若 12%(m25%, f8%)] ※札幌若男 31%, 内陸若男 25%, 海岸若男 0%]・クリヤー (来れば) [老 6%(m9%, f5%), 中 8%(m6%, f8%), 若 12%(m25%, f8%)] ※札幌若男 31%, 内陸若男 25%, 海岸若男 0%]・ワカンネー (わからない) [老 8%(m13%, f5%), 中 20%(m46%, f3%), 若 24%(m55%, f15%)]・海岸部と内陸部での本バ (本を) [海岸老 17%(m25%, f14%), 中 17%(m17%, f17%), 若 38%(m33%, f39%), 内陸老 10%(m13%, f8%), 中 6%(m9%, f5%), 若 26%(m0%, f33%)]・ドコ+無助詞? (どこに・へ・さ?) [老 12%(m13%, f11%), 中 25%(m34%, f19%), 若 50%(m50%, f50%)]

コチョコバイ類 (コチョコバシー・コソバイ) (グラフ5) は、調査II時期に新方言的とされたが (井上 1976)、調査IIIでは特に中年層 (調査II時代の若年層) から若年層へ向け、共通語形「くすぐったい」と勢力をほぼ二分し、明らかな衰退は見られない。大半が「テレビでも使う」と答えていることから地方共通語に向かう項目として、今後も注視すべきと思われる。

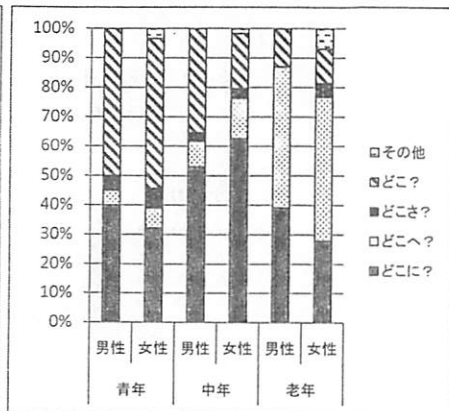
オモシクナイは、調査IIIで札幌中年層 (42%) の多用が目立つ。調査II時代の札幌の若者が使い始め、その後も地方も含めた若年層に継承されたのではないか。1990年代、札幌の高校生の間では最も優勢な語形 (44%, 男 37%, 女 49%) とされた (道場 1994)。

スリヤーについて、調査II(a)で札幌の若者が先導との指摘があり、調査IIIにおいても札幌若年の高割合からその継承がうかがえる。クリヤーについても同様かと思われる。

グラフ5 コチョバイ類・モチョコイ類 (調査III)



グラフ6 どこへ・に・さ・無助詞類 (調査III)



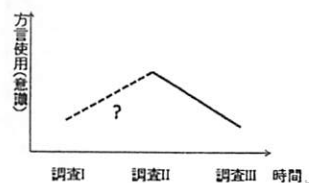
『どこ+無助詞?』(グラフ6)は、『道で親しい友達に、その行先を尋ねるとき、ふつうどう尋ねますか』という問いに対する回答である。調査II(a)で、方向を尋ねる「エ」はフォーマルな場面(つまり、より婉曲的)、「ニ」はより直接的で行き着き先や動作の目的を尋ねる具体的質問に使われるとする場面差が指摘されている。これらの場面差は使用割合の年齢差にも反映され、より婉曲的な「エ」は高齢層に多用され、より直接的な「ニ」は低年齢層に多用される傾向にあるとされている。さらには、特に札幌の10代の若者の間で、カジュアルな場面での無助詞が極端に多くなっているという指摘もある。

調査IIIでは、上記の指摘どおりの傾向が見て取れる。老年層では「どこへ?」が最も優勢だが、中年層では「どこに?」に優勢形が置き換わる。さらには、中年層(調査II(a)当時の若者)で「どこ+無助詞?」が増え始め、若年では優勢形として普及している。地域差も特段見られないことから、調査II時代に札幌の若者を中心に始まった変化が、その後、全道の若い世代に広まったのではないだろうか。

III・C.「短命」項目：調査II時点で生成が指摘されたが、調査IIIでは明らかな衰退、もしくは死語化が確認。

タイプIII 土着語化

タイプIII 細分類III 「短命」



語彙: マテナ(丁寧な) [老 36%(m17%, f45%), 中 33%(m26%, f37%), 若 3%(m10%, f0%) ※内陸老 38%, 中 46%, 若 6%]・オモロクナイ(おもしろくない) [老 0%, 中 1%, 若 6%]・オモシイ(おもしろい) [老 8%, 中 14%, 若 10%]・オモロイ(おもしろい) [老 3%, 中 1%, 若 7%]・ゲツパ(ゲレ) (びり) [老 21%, 中 28%, 若 11%]・ケツパル(がんばる) [老 2%, 中 4%, 若 7%]・オッコッタ(落ちた) [老 6%, 中 15%, 若 15%]

文法: コレバ(来れば) [老 8%(m9%, f7%), 中 16%(m23%, f10%), 若 16%(m15%, f15%) ※札幌中男 42%, 内陸中男 18%, 海岸中男

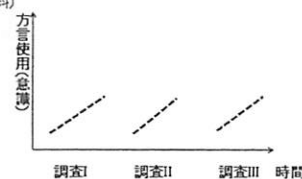
8%]・チガカッタ(ちがった) [老 6%, 中 0%, 若 14%]

ケツパルは、調査II時代、札幌・旭川・網走の3都市に共有される有力な新方言として注目されたが(小野 1983)、短命に終わり北海道方言の変化には結びつかなかった。

III・D.「若年再生」項目：調査II時代に若い世代による使用が指摘されたが、調査IIIで同一世代(中年層)により継承されることはなく、繰り返して若い世代のみが使用(=年齢傾斜)。

タイプIII 土着語化

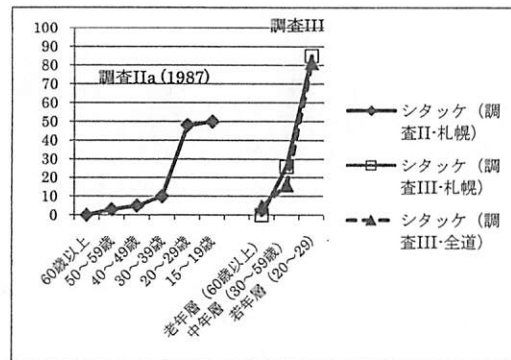
タイプIII 細分類III 「若年再生」(=年齢傾斜)



語彙: ヤツパ(やはり) [老 3%(m0%, f5%), 中 26%(m11%, f34%), 若 70%(m65%, f72%)] ※札幌中男 0%, 女 53%]・シタツケ(さようなら) [老 5%(m4%, f5%), 中 16%(m23%, f12%), 若 81%(m80%, f82%)] ※札幌若年 85%(m92%, f81%), 内陸若年 72%(m50%, f93%), 海岸若年 70%(m67%, f72%)]・シタツケ(そしたら) [老 0%, 中 3.3%, 若 28% ※札幌若年 32%(m38%, f26%), 内陸若年 26%(m25%, f27%), 海岸若年 11%(m0%, f22%)]

文法: 該当なし。

グラフ7 シタツケ(さようなら)の経年比較(調査II vs. 調査III)



上記の項目はどれも方言意識が強い。ヤツパは、地域・性別に関係なく若年層のみで浸透(しかし、札幌中年女性が53%なのはなぜか?)。一方、元祖形であるヤツパン(全道若年15%, 中年26%, 老年42%)は若者に「古臭い」と評価されているようである。

シタツケ(さようなら)については、いつの時代も変わらず、

繰り返して若者が採用するが、加齢とともに廃れ、他世代へも伝播しない語彙と言える。

5. 考察とまとめ

北海道方言の過去半世紀での経年的動態を見渡すことでいくつかの重要な知見が得られた。第一に、先行研究から指摘されてきた全道規模での共通語化の進行を背景に、多くの語彙・文法項目の使用(意識)において急速な衰退が改めて確認された。しかし一方、調査II時点(1980年代)では方言形の衰退(つまり共通語化)には多大な地域差が見られたが、現時点(調査III)における衰退の様相では、いくつかの項目において「海岸部の遅れ」は一貫して見られるものの、とりわけ若い世代における地域間差異は僅かなものとなっている。これは言語を取り巻く社会環境の大きな変動期と関係が深いであろう。調査I・IIの被験者とは対照的に、今回(調査III)の被験者(特に、老年・中年層)は、高度経済成長を背景とした都市化や人口移動の活発化に伴う

方言接触が日常化した時代に生きた人々である。また、テレビの爆発的な普及（1960年代初頭）の時期に言語形成期を過ぎた被験者が多く、超地域的な共通語化とも符合する（Ota & Takano, to appear）。

第二に、今回の実時間的検証から、「一個人の言語は一生変わらない」とする前提に立つ「見かけ上の時間」仮説に対する明らかな反証が得られた。生涯変化の存在は、調査II(a)における富良野パネル調査から語彙面・アクセント面（国研1997）、文法面（佐藤2011）ですでに確認されている。今回のトレンド調査の結果においても、方言形の衰退が四半世紀または半世紀後の同一話者世代（つまり、調査I若年層・調査II中年層＝調査III老年層、調査II若年層＝調査III中年層）で拍車がかかっている事実、および調査IIで指摘された若年層の新方言が調査IIIでは当該世代（中年層）のみならず、老年層にも伝播している事実から、すくなくとも語彙・文法面における生涯変化の可能性は大であると判断できる。⁷

第三に、個々の生涯変化が北海道全体の共通語化に拍車をかける一方で、多くの方言形が半世紀の時を経ても変わらずに保持されていることも明らかになった（佐藤2011）。また、大規模な共通語化と並行して進行する新種の土着語（方言形）の生成がこの半世紀の間、いつの時代にも繰り返行われてきたこと、また、それが現在も進行中であることも明らかになった（真田2000）。興味深いことに、共通語化とは相対する新種の方言形の定着においても、かつて指摘されたような地域間差異（小野1983）はほとんど見られず、おそらくはマスメディアを媒体とした関西方言や東京新方言の伝播事例が示すように、全道の若い世代が地域的格差なく一様に全国的な新しい表現を積極的に採用している感がある。

また、新方言形の伝播においては、日本語全般にも見られる男女差の縮小（中性化、特に男性の歩み寄り）が特徴的だと言える。生成当時は女性特有とされた形式がその後、男性にも使われるようになり、社会全体に拡張していく事象がしばしば見られた。

最後に、今後の北海道方言をどう見ていくべきか、ポイントは上記類型の中でも特に従来型方言形の「中・小規模保持」、および新方言形の「大規模 / 中・小規模拡散」にあると考える。今日の比較的若い世代は明らかに二方言（共通語と方言形）併用能力に長けており、場面や状況、話者の社会心理（アイデンティティなど）などと深く結びつきながらどちらかのコードが選択される。今後はより日常的な場面での自然発露的な談話に目を向けるべきことは言うまでもなく、今まで以上に方言形使用における場面・状況差、さらには方言形を選択する話者の心理や意図（例えば、方言使用の特殊効果など）を分析の射程とする質的観点の統合が強く望まれる。

引用文献

Blake, Renee & Josey, Meredith., "The /ay/ diphthong in a Martha's Vineyard community: What can we say 40 years after Labov?" *Language in Society* 32(4), 2003, pp. 451-485.

⁷ 一方、アクセントは生涯変化するが、音声は変化しづらいとする立場もある（国研1997、横山・真田2010）。筆者自身はアクセントの生涯変化については懐疑的である。2010年より札幌市山鼻地区において、先行調査（小野1993）の被験者を20年後に再調査する実時間パネル調査を継続中であるが、分析対象となる語彙、数十項目中、共通語アクセントへの生涯変化は皆無とは言えないものの、あったとしても一人当たりせいぜい数項目（数パーセント）程度で、個人のアクセント体系全体を揺るがすような組織的変化は見られない。変化を示す語彙も人によってまちまちである。比較的高い割合（10%台）で生涯変化を示す話者はむしろ少数派という結果がこれまでの段階で得られている（高野2011）。これらの結果は、主に当時の中年層（現在の老年層）から得られたものであるため、今後、当時の若年層（現在の中年層）にも分析の射程を広げた際にどのような結論となるのか、近い将来、機会を見て論じたいと考えている。

Chambers, J.K., & Trudgill, P. (1998). *Dialectology (Second Edition)*. Cambridge: Cambridge University Press.

道場優 (1994) 「高校生における北海道方言の実態について ～札幌市内高校生の場合～」北海道方言研究会 20周年記念論文集 394-407 頁

井上史雄 (1976) 「道南浜ことばにおける共通語化のパターン分類」北海道大学人文科学論集 13

井上史雄 (編) (1983) 『新方言と言葉の乱れに関する社会言語学的研究 ～東京・首都圏・山形・北海道～』科学研究費 総合研究A 研究成果報告書

井上史雄・玉井宏児・鎌水兼典 (編著) 「東北・北海道方言の地理的・年齢的分布」科研費基盤研究 (B) 『現代東北方言の地理的・社会的動態の研究』研究成果報告書

河崎裕子・井上史雄 (1983) 「首都圏の＜新方言＞」井上史雄 (編) (1983) 『新方言と言葉の乱れに関する社会言語学的研究 ～東京・首都圏・山形・北海道～』科学研究費 総合研究A 研究成果報告書 183-208 頁

見野久幸 (2010) 「北海道方言の地理的勢力分布と動態・伝播の諸相」日本方言研究会 発表予稿集 25-34 頁

見野久幸・朝日祥之 (編) 『接触方言学による「言語変容類型論」の構築 ～北海道と東北・新潟の30歳代から50歳代における方言の地理的勢力分布』国立国語研究所 共同研究報告 12-01

Kerswill, P., & Williams, A. (2000). Creating a New Town koine: Children and language change in Milton Keynes. *Language in Society* 29: 65-115.

国立国語研究所 (1965) 『共通語化の過程 ～北海道における親子三代のことば～』国立国語研究所報告書 27
—— (1997) 『北海道における共通語化と言語生活の実態 (中間報告)』国立国語研究所

萩野綱男・山数陽子 (1983) 「東京における新方言」井上史雄編『＜新方言＞と＜言葉の乱れ＞に関する社会言語学的研究 昭和57年度科学研究費補助金 (総合研究A) 研究成果報告書 17-69 頁

小野米一 (1983) 第9章「北海道方言の＜新方言＞事象」井上史雄編『＜新方言＞と＜言葉の乱れ＞に関する社会言語学的研究 昭和57年度科学研究費補助金 (総合研究A) 研究成果報告書

—— (1993) 「札幌市方言多人数調査資料について」『東日本の音声 論文篇(3) 主要都市多人数調査 (札幌市・名古屋市) 報告』研究成果報告書 (研究代表者 加藤正信) 51-86 頁

Ota, I., & Takano, S. (to appear). The media influence on language change in Japanese sociolinguistic contexts In Jannis Androutsopoulos (ed.), *Mediatization and Sociolinguistic Change*, Mouton de Gruyter.

真田信治 (編著) (1999) 『展望 現代の方言』白帝社

真田信治 (2000) 『脱・標準語の時代』小学館文庫

Sankoff, G., & Blondeau, H., "Language change across the lifespan: /r/ in Montreal French." *Language* 83 (3), 2007, pp. 560-88.

佐藤亮一 (2011) 「北海道における (約) 27 年間の言語変化 (文法項目について) ～国立国語研究所のパネル調査から～」北海道方言研究会会報 第88号 83-91 頁

高野照司 (2011) 「札幌方言名詞アクセントの実時間研究 ～山鼻地区パネル調査 第一次報告～」北海道方言研究会会報 88号 40-58 頁

横山昭一・真田治子 (2010) 「言語の生涯習得モデルによる共通語化予測」『日本語の研究』6(2), 31-45 頁